九つの人九つの場をしめて
ベースボールの始まらんとす
子規

〈子規とベースボール〉

「の・ボールするぞな」

子規門の双璧と称される、河東碧梧桐・高浜虚子との出会いはベースボールだった。

日本にベースボールが渡来したのが明治5年頃、東京大学の前身である開成学校の外国人教師（H・ウィルソン）によって伝えられたとされています。それから17年を経て、東京から帰省していた子規が河東碧梧桐にベースボールを教えたことから野球が松山に伝えられたといわれ、その翌年には高浜虚子ら松山中学校の生徒に混じってバッティングをしています。意外にも子規門の双璧と称される河東碧梧桐・高浜虚子との出会いは、ベースボールだったのです。

子規は明治18年には既にベースボールに親しみ、翌年には「弄球（ろうきゅう）」という訳語をベースボールにあてています。最も熱中したのは明治21～22年で、サウスポーの名キャッチャーとして知られていました。

バット1本、球1個を命のように思うほどの野球好きだった子規のペンネームは「の・ボール」と読ませる「能球」「野球」があり、これらは幼名の"升（のぼる）"にちなむものです。

後に新聞記者として活躍していた子規は「直球」「飛球」「打者」「走者」など現在も使用されている野球用語を試訳して随筆に発表し、全国に野球を紹介しました。また野球の楽しさを自らの俳句や短歌、小説など多数の作品にも取り入れて野球の普及に貢献しました。

これらが「野球王国愛媛」の礎を築いたとして、子規は没後１００年を経て２００２年、野球殿堂入りを果たしたのです。